

新規制基準による敷地内・敷地近傍断層

- 1 敷地内直下断層 α ・ β 断層
- 2 敷地近傍の断層 寺尾断層
- 3 真殿坂断層の活動性

敷地内直下断層 a・β断層

①1号炉設置許可申請時



被告の主張の変遷
①番神砂層堆積(5万年前)以降の活動は無い

②新指針(平成18年)時



②安田層堆積(12~13万年前)以降の活動は無い

③新規制基準時



③古安田層堆積(20万年前)以降の活動性は無い

敷地近傍における寺尾断層の存在

寺尾断層

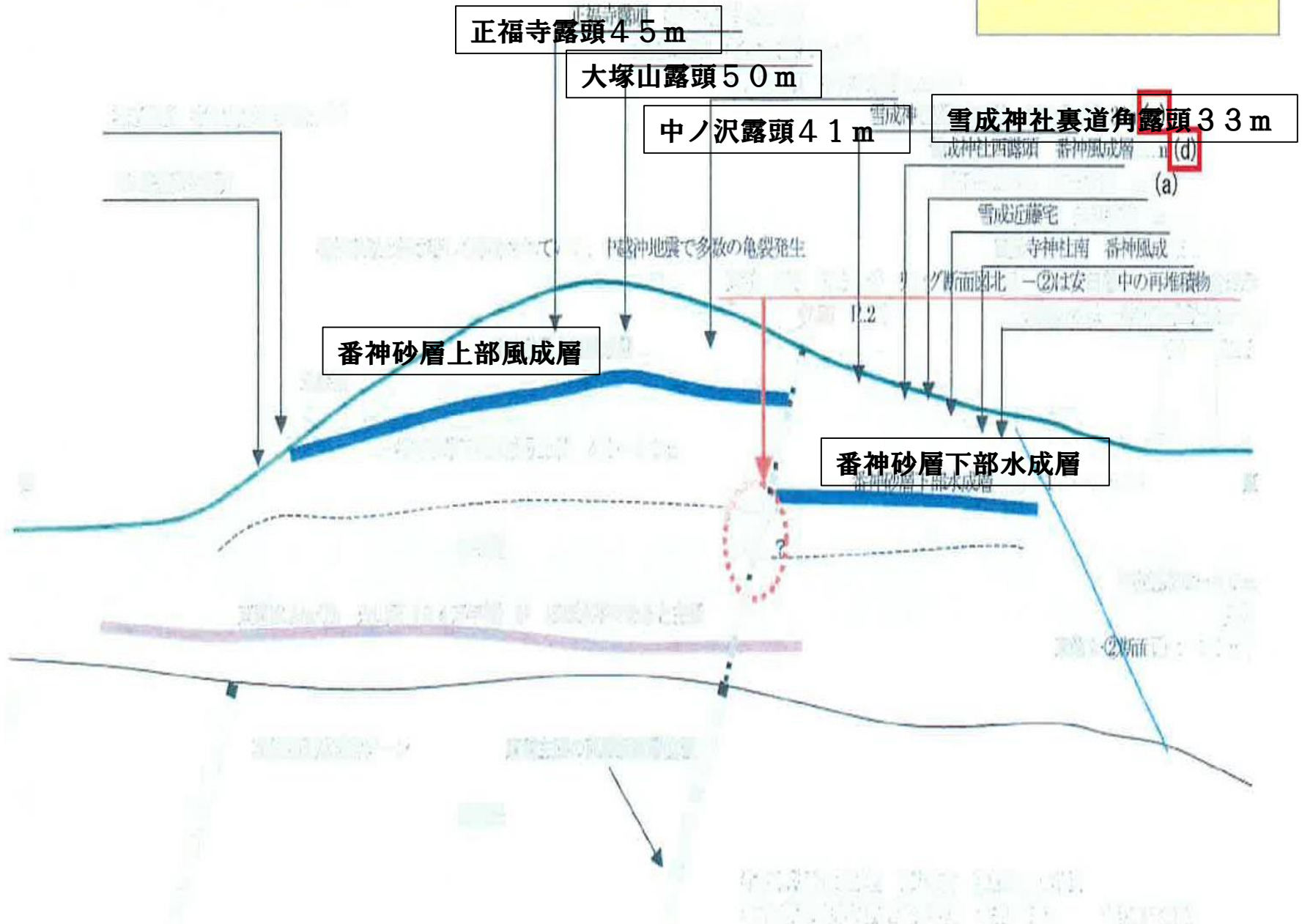
- ・ 敷地境界から北東へ約600m
- ・ 後谷背斜と真殿坂向斜の間
- ・ 番神砂層下部（大湊砂層）を切る

被告は「地すべり性」
断層と評価

再調査を指示された

- ①地すべり性断層は尾根側（高所）から谷側（低所）へ下るもの
- ②新規制基準によれば、敷地極近傍の断層は「地すべり性断層」であっても断層の本体及び延長部が重要な安全機能を有する施設直下にはないことを確認すること。

大湊～西元寺・十日市 (N2路線) 断面概念図



正福寺露頭 4.5 m

大塚山露頭 5.0 m

中ノ沢露頭 4.1 m

雪成神社裏道角露頭 3.3 m

番神砂層上部風成層

番神砂層下部水成層

中ノ沢地震で多数の亀裂発生

雪成近藤宅

寺神社南

雪成神社西露頭 番神風成層 (d)
(a)

断面図北-②は安中の再堆積物

1.2

?

中越沖地震後の敷地近傍の変動状況

露頭調査

番神砂層と大湊砂層との
境界の標高

真殿坂断層を挟んで
約10mの標高差

8箇所の露頭の標高差につ
いて概ね35~40mに分
布している。

真殿坂断層の活動は無い

① 35~40m

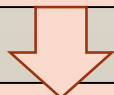
より低いもの(16.5m)は地すべり。

より高いもの(48m)は両側の露頭が40.5mであり、問題ない。

② 阿多鳥浜テフラが「ほぼ水平」に堆積している

敷地近傍における真殿坂断層による影響

全体としてみて、概ね
35m~40mに分布



結局、阿多鳥浜テフラ
の「ほぼ水平」に集約

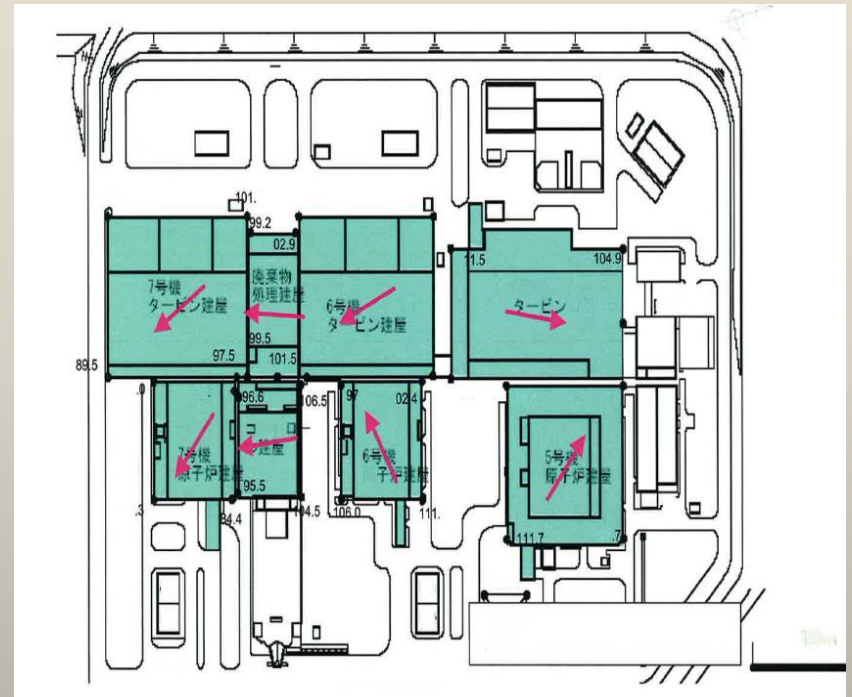
敷地北側のボーリング調査

90mで標高差1.55m
1000分の17
真殿坂断層に向って傾斜

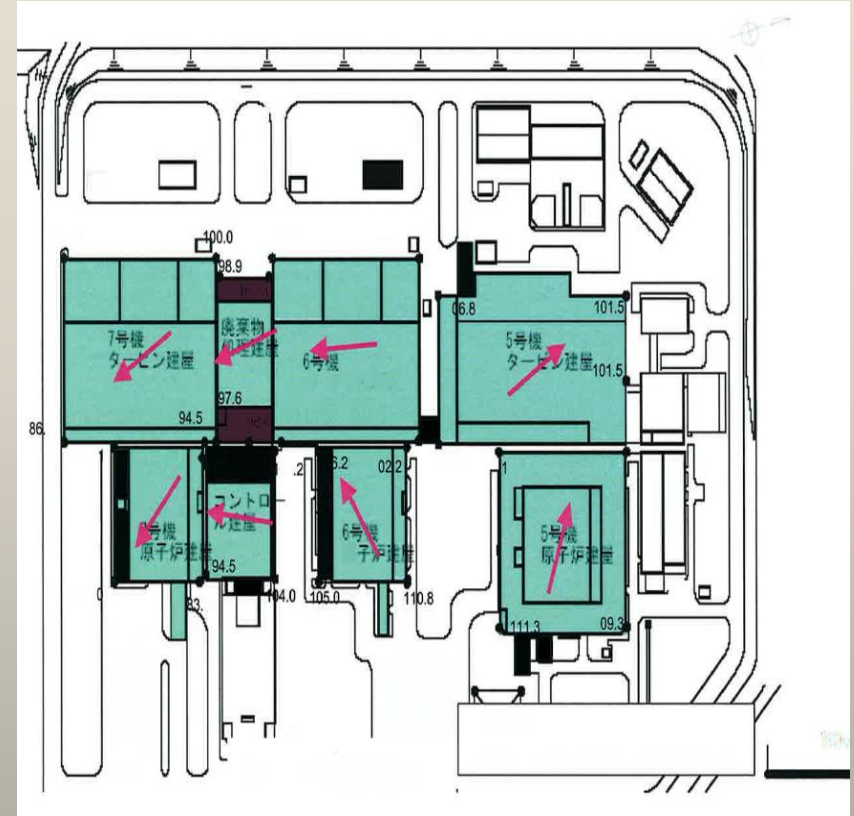
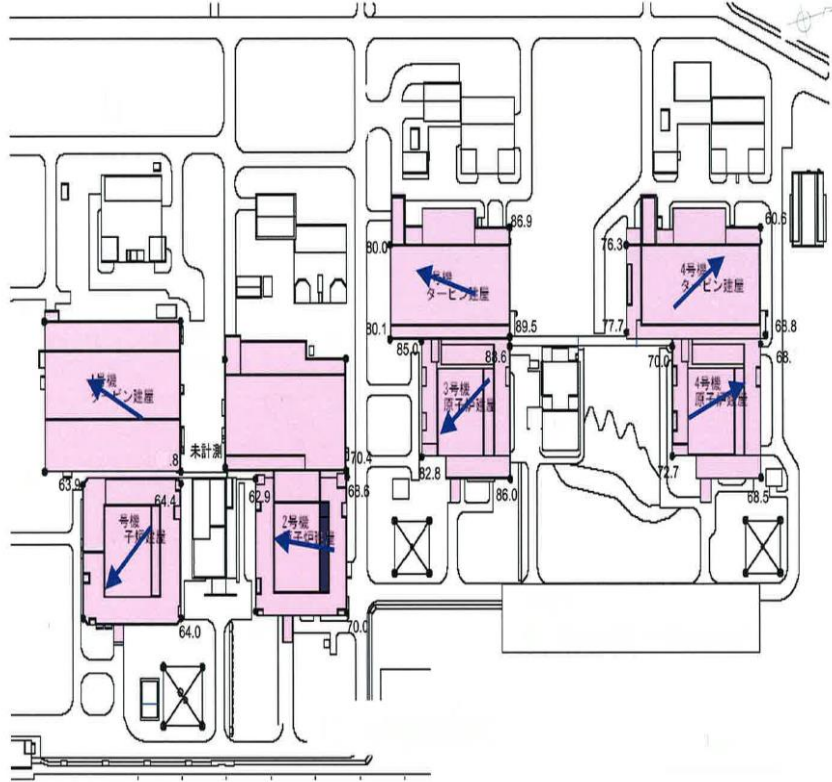
敷地内群列ボーリング調査

約78mで標高差1.15m
1000分の14
約107mで標高差1.94m
1000分の18

中越沖地震後建屋変動図 (第1回目)



中越沖地震後建屋変動図 (第2回目)



中越沖地震後の建屋の変動状況

